



中国がわかるシリーズ 36 南宋と金の講和

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

1129年、杭州(臨安)に遷都して、ようやく一息ついた南宋の皇帝、高宗は、宰相、秦檜とともに金との講和を目指しました。1135年に入ると、モンゴル系諸部族が(金の)北辺へ入寇し始め、金もそれほどの余裕がなくなってきたのです。1138年、両者の間で和議が成立し、宋は臣下の礼をとり、金に歳貢を送ることになりました。

主戦派の軍人、岳飛は、猛反対しましたが、1141年、秦檜は岳飛を謀殺し、1142年、再度、金と和議(歳貢、銀25万両と絹25万匹)を結びました。後に、儒教に民族的なイデオロギーを吹き込んだ朱子学によって、岳飛は救国の英雄となり、秦檜夫妻は、売国奴の代名詞となりました。(杭州の岳王廟には、今でも鎖で繋がれた秦檜夫妻の像が置かれています。岳王廟にお参りした人々は、帰路、秦檜夫妻の像に唾を吐きかけていくのです)。

当時の金と南宋の軍事力を冷静に比較すれば、秦檜には少し気の毒な気がしないでもありません。対外強硬論は常に世の喝采を浴びるものですが、現実には戦争で苦しむのは多数の民衆であって、指導者には、罵倒に耐える勇気もまた必要なのです。高宗にはそれがありません。

1159年、日本では、2つの騒乱(保元の乱、平治の乱)を勝ち抜いた平清盛が武士として初めて実権を握りました。東アジアの情勢をよく掴んでいた清盛は、大輪田泊(神戸港)を整備し、南宋(や高麗)との貿易に尽力して、莫大な富を蓄積しました(世界遺産の厳島神社にその名残が見られます)。それまで、博多や敦賀を基点として行われていた高麗や宋との民間交易は、清盛によって遣唐使以来、再び、国家ベースに引き上げられたのです。

日本と大陸(中国)との交易は、遣唐使の廃止により、民間ベースに切り替わりましたが、全く交易のサイズが落ち込むことはなく、古代を通じて一貫して拡大してきました。交易だけではなく、例えば、喫茶(粉茶)の習慣をわが国に伝えた栄西は、勉強のため2度も宋に渡っています(また、宋建築の新技术を摂取した栄西は、東大寺大仏殿の再建をも手がけました)。大陸と日本の間では、人の交流も途切れることなく続いていたのです。